楽しさのせぇ
奥多摩
《第27号》
平成24年10月15日
奥多摩観光協会

木版画 安藤修二

～季節だより～

秋の山歩きにはベストの季節がやってきます。

今の世はネットの時代で、家に居ながらにして何でも手に入ります。

昔は、駅前に商店街があって、そこに行けば、八百屋が「今はナスが旬で安くて美味いよ。油みそなんてどうよ！」と客に声をかける。客が、「作り方がわかんねぇー」と応えれば、作り方も教えた。魚屋では、「今、サンマが旬で脂が乗っていて美味いよ。」と店先で声を張り上げる。そんな会話を楽しみながらの買い物であった。

今は、スーパーの店員に聞いても、煮魚の料理法も知らない。また、ホウレンソウとコマツナの違いも分からないで売っている。

年寄りには、買い物に毎日出るのが良い運動であった。今は、家に居て何でも手に入る。でも、出歩かなくなる結果、足が動かなくなったらどうする？こんな時代だからこそ、山里歩きや軽い山歩きが必要になってくる。

奥多摩に来れば、ボランティアのガイドさんがコース案内に加えて、自然観察や郷土史などの説明もしてくれ、楽しさが倍増する。

ますますガイド付きの山歩きがありがたがられる時がやってきた。本当にありがとう、奥多摩のガイドさん。

１日の森林浴で、心のケア的には、１ヶ月間も効果が持続するとか。さぁ、皆さん！奥多摩に来てガイドさんと山を歩きましょう。

（奥多摩観光協会 副会長　原島 重樹）

奥多摩・山里歩き絵図

－21世紀の宝さがし－

この絵図は、21の集落ごとに、集落全図・歴史・見どころ・宿泊施設を掲載したものです。自然の素晴らしさで知られる奥多摩ですが、これら集落の歴史や文化も、何物にも代えがたい宝物です。

この絵図は、無料で奥多摩駅前観光案内所で手に入ります。

～ 熊との遭遇記 ～

平成24年7月23日、私は、翌月に迫った富士登山のトレーニングのつもりで、ひとりで本仁田山に登った。鳩ノ巣駅下の西川沿いにある民家の脇を通り、急登を経て花折戸尾根に取り付き、そのまま尾根伝いの道を辿った。

ゴンザス尾根を登ってきた道が合わさる手前の南斜面は、まだ若い人工林で、背丈を超えるススキが登山道に覆いかぶさり、葉に付いた昨日の雨粒がズボンを濡らした。そのススキが数箇所、2㎡ぐらいの規模で押し倒されていた。鹿か他の動物かは判然としないが、いずれにしろ獣の休んだ痕跡である。5ｍぐらいしか見通しが利かない場所であったこともあり、私は、大声を出しながら歩いた。

山頂からは、安寺沢に向かい大休場尾根を下った。そこで、それまで熊よけのつもりで、手に持って樹幹や葉を叩いて音を出していた小枝を捨てた。急坂の下山となるので、両手をフリーにしておきたかったからである。また、下りでは足音が大きくなるので、熊は気づいてくれるだろう、との思惑もあった。

30分ほど下ると、登山道は大休場尾根から外れ、西向き斜面に入る。

若いヒノキ人工林を過ぎて、雑木林に入った時、物音に気づいて右手上方を見上げると、山腹を斜めに横切り、真っ直ぐに私に向って突進してくる黒い物体に気づいた。私から70mほどの距離だった。

その物体が熊だと知った私は、すぐに道を走り出した。その間も、熊はもの凄い速さで斜め後方から私に近づいてくる。ツヅラ折の道が右に曲る場所に来た時、私は、とっさに道から外れて、真っ直ぐに雑木林の斜面に飛び込んだ。右に曲れば熊に近づく、と判断したからである。そのまま斜面を駆け下った時、足が滑り転倒してしまった。「あ～ッ！もうダメだ！」と振り返ると、熊は、10mほどの距離まで迫っていた。

しかし、私が振り返ったちょうどその時、熊は立ち止まりもせずにクルッと反転して、来た方向に駆け上がって行ったのである。

この幸運に、ゆっくりと身体を起こした私は、それでも少しの間、身動きせずに熊が走り去った方向の様子をうかがった。その時、明らかに自然界の物音とは違う音が耳に飛び込んできた。何かを叩く音のようだった。斜面に飛び込まずに道なりに進めば通過したと思われる地点辺りから聞こえている。

私は、なるべく音を立てないように斜面をゆっくり下った。予想通り、ツヅラ折の道は私の転倒した場所のすぐ下に折り返してきていた。その道に出た後は、後ろを気にしながらも一目散に駆け下った。

安寺沢の舗装された林道に出て奥多摩駅に向いながら、さっき経験した悪夢のような出来事を振り返った。

あの時、私に向って突進してきた熊は母熊だったのだろう、そして、私が転倒した場所で聞いた物音は、たぶん、子熊が出していたものなのだろう。子熊は、最初からそこに居て、母熊は子熊から50～70ｍほど離れた斜面上方に居た。そんな位置関係で、それと知らない私が子熊の居る方向に下って行った。そして、私の接近に気づいた母熊が、「子どもが襲われる！」と感じて私を追い払おうと、突進してきたものと思う。

逃げる時、私が道から外れて林の中に飛び込まずに道なりに下り、結果として子熊に近づいたら、間違いなく母熊に襲われたであろう。母熊は、私の転倒に気づきながらも、私が子熊から離れる方向に向ったことで安心して引き返したものだろう。

熊は、基本的には人間を恐れている。だから、登山道の曲がり角などでの突然の遭遇以外では、人間を襲うことはなく、物音や臭いで人間の接近に気づけば先に逃げていく。私は、過去4回熊に出会っているが、そのいずれもが逃げていく姿であった。

子連れの熊の場合も、一般的には、先に気づいた母熊が、まず、唸り声や立ち上がる姿で人間を牽制・威嚇する。いきなり人間を襲うことはしない。しかし、今回の場合、親子が離れていたために、母熊は、牽制や威嚇と言う段階を経ずに、まず、私を追い払う行動をとったのであろう。

今回の経験で、私は、ベルなどの熊よけグッズは常に持ち歩くべきである、と改めて思った。遠くから近づくベルなどの音に気づけば、子熊と離れていた母熊も子熊の近くに戻り、人間から遠ざかろうとするだろう。仮に、好奇心旺盛な子熊が動かず、そこに人間が近づいたとしても、いきなり襲うことなく、威嚇の段階を経てくれると思うからである。

＊　＊　＊　＊　＊

最近のニュースで、熊が畑で人を襲った話題が報じられた。このように、餌を求めて人里に出没する熊は、人間の領域に入る危険性を意識するせいか、山の中に居る場合より攻撃的になる傾向があるのではないかと感じている。　（堀越弘司）

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その25 ～

「いろいろな救助要請」

今年の奥多摩の山岳遭難の件数は、これまで 17 件と例年に比べれば少ない。春の安定しない天候と夏の異常高温、9 月に入っても残暑が厳しい。そのため登山者が少なかったせいかもしれない。それでも死亡事故は２名だから、決して楽観できる数字でもないのだ。

山岳救助隊は山岳遭難だけに出動するのではない。青梅署管内の山間部における変死体の収容なども、仕事の大きなウエイトを占める。そのほとんどが自ら命を絶つ自殺である。山岳遭難は事故だからしかたがないとしても、自殺は故意である。人の生死にかかわる仕事についているのだから、遺体の収容などは仕事と割り切らなければならないが、本人の苦しみや、残された遺族の事などに思いを致すと、やるせない気持ちになることもある。

巷では、脱法ハーブが社会問題になっている。先日、病院の医師と看護師が、看護師の部屋で脱法ハーブを吸飲し、救急車で病院に運ばれたなどと笑えない報道があったばかりだ。

２年前の 10 月 13 日午前 10 時ころ、山岳救助隊員でもある日原駐在所の前田小隊長から奥多摩交番の山岳救助隊に連絡が入った。「いま若い男性が来て、山の中で仲間４人がいなくなったと救助を求めている」と言うものだった。私はちょうど在所していたし、高田副隊長、橋本小隊長も交番にいた。近くの駐在の隊員に招集をかけ、山岳救助車で日原駐在所に急行した。

駐在所内で前田小隊長が男性から詳しい事情を聴取していた。男性はＹ(20 歳)で、10 月 12 日、真夜中の午前０時過ぎに、都内のバンド仲間の男性５名で車両１台に乗車し、小川谷林道終点まで入った。車からキャンプ用具を降ろし、焚き火をし全員でビールで乾杯をした。その際、植物の実をすり鉢ですり潰し、酒に入れて飲んだ。Ｙはそれからの記憶が全く無く、目が覚めたらひとり沢の傍に上半身裸、トランクス姿で寝ており、近くには誰もいなかったという。Ｙは藪の中を林道まで登り上げ車に戻ったがそこには自分たちが食い散らかした跡があるだけで、大声で仲間を呼んでみたが誰からの応答もなくＹは徒歩で日原まで下ってきて、集落の民家で衣服を貰い、駐在所に救助要請に来たものであった。

意識が無くなった時から丸一日半は経つのに、まだＹの言動がおかしい。「何か薬でもやっているんじゃないか」と言うと「何で疑っているんですか」と突っかかってくる。「４人もいなくなってるんだ、本当の事をいわなきゃわからないだろう」と一喝し、とにかくＹを同道し現場に行くことにした。

集まった救助隊員の９名とＹは、山岳救助車とパトカーに分乗し小川谷林道を登っていった。突然Ｙが「車を停めて下さい。川の中にノアが沈んでいます」という。車を停めてみんなで外に出る。「ほら、あそこにトヨタのノアが見えるじゃないですか」。みんなで探したが何にも見当らない。「まだ幻覚をみているのか。しっかりしろ」とまた一喝。

砂利道の林道を約８キロ、カーブを曲った所にＹの言う黒いトヨタ・ノアがドアを開けたまま停まっていた。その少し先、林道終点の手前に焚き火の跡があり、飲みかけのコップや酒などが散乱していたが、誰も見当らない。林道の下は草木の生えた崖になっており、みんなで手分けして大声を出しながら付近を探し回った。しかし何の応答もなく車の所に戻った。

車の外にすり鉢と、見たこともない草か木の実が幾つか転がっていた。Ｙに「これをすって酒に入れて飲んだのか」と聞くと「そうです」と言う。「どこで採ってきたんだ」と聞くと「この近くの山で採りました」と言う。「いい加減なこと言うな。こっちは 20 年もこの辺りの山を駆けずり回っているんだ。こんな実はいま初めて見たぞ。正直に言うんだよ」と言うと「家の近所の公園で採ってきました」と言う。怪しいもんだがそれ以上そこでは追及しなかった。

午後からは警察犬も頼んで捜索すべく、取りあえず捜索態勢を整えて出直そうと林道を下に向かって歩いていると、下からふらふら登ってくる男がいた。坊主頭はリーダーのＨ(35 歳)と思われた。「Ｈくんか」と声を掛けると「はいＨです。どうなっているんですか」と聞いてきた。「どうなっているのか聞きたいのはこっちなんだよ」と言ってこれまでの事情を聞くが、Ｈも 12 日の深夜以降の記憶が全くなく、幻覚を見続けていた。今朝気が付くと沢の傍にひとりで寝ており、山の中を７時間くらい彷徨い、やっと林道に出たのでここまで登ってきたと言う。「みんなは無事ですか」と言うので「何人でここに来たんだ」と聞くと「５人です」と答えた。人数は間違いないようだ。「今確認できているのは、Ｙくんと君のふたりだけだ。あとの人は午後から本格的に探

すことにした」と言ってふたりを車にのせ下山した。

午後になってYとHのふたりを刑事課に引き継ぎ、残り３人の捜索を実施した。警察犬も投入しキャンプ地を中心に沢筋、尾根筋と夕方まで行ったが他の者の発見には至らなかった。

10月14日、早朝から車に乗って探しに入った遭難者等の仲間が、午前８時40分ころ林道を歩いているS(32歳)を発見し保護した。Sも記憶が戻った時は沢の近くに倒れており、幻覚を見ていたという。何を聞いても要領を得ない状況であった。

山岳救助隊は５個班に分かれ、小川谷本流や犬麦谷、林道より上段についている仕事道などに入り広範囲に捜索した。私は前田小隊長とカロー谷出合いから中段道に入山した。ハンギョウ尾根を大きく回り込み滝上谷を越え、大栗尾根を末端まで下り林道に降りたが、何も発見できなかった。夕方他の班も下山してきたが、何の発見もなかったようであった。朝発見になったSも仲間と一緒にいたので、他のふたりと会わなかったかを聞いた。「Nと沢の辺りで会いましたが、いつの間にかまたひとりになっていました。Nは会えばすぐ分ります額に『バカ』と書いてありますから」。真面目な顔で言っているのだから、これはダメだ。飲んで３日にもなるのに恐るべき植物の実である。

10月15日朝から３個班に分かれ、沢筋と山中に分かれて捜索する。まだ完全な覚醒はしていないと思うが、残るふたりも生きていることを信じ広範囲な捜索となる。

林道は小川谷の左岸についているのだが上部で右から犬麦谷が注ぎ込む、犬麦谷は沢登りに人気のある沢なのだが、林道は最上部の終点近くで再度犬麦谷を横切る。そのため犬麦谷下部の渓相は荒れ、沢登りの登山者も林道上部から入渓する人が多くなった。

その犬麦谷下部を捜索していた１班が夕方になって汚れたズボン１本を見つけ、近くを丁寧に探したがそれ以上は見つからなかった。また対岸の山中を捜索していた３班はウエストバックと運動靴を発見し下山してきた。

これらを総合すると、やはりキャンプ地から下の犬麦谷を中心とする両斜面にいる可能性が高い。明日はその辺りに焦点を絞り捜索を実施することにした。

10月16日、午前中に別件の救助活動があり、全員そちらに従事したため捜索は午後から開始となった。絞り込んだ犬麦谷下部を３個班に分かれ150メートルほど間隔を開け、林道下の急斜面をしらみつぶしに探して行った。

午後３時10分ころ３班が、犬麦谷に注ぐ浅いルンゼ下で俯せに倒れ、すでに死亡している男性を発見した。そして発見の報を無線で傍受して３班方向に向かっていた１班が、下の犬麦谷方向から「助けてくれー」と言う声を確認し沢に降りたところ、頭部から出血し擦過傷だらけの男性が助けを求めていた。名前を問うと「Kです。」と言う。K(23歳)は、衰弱しているものの意識ははっきりしており会話はできたので、12日以後のことを尋ねたが、他の者と同様意識がなくなり、幻覚を見ていたという。この犬麦谷は何度も探したはずなのに、どうして発見できなかったのか。意識もうろうとして方々を歩き回っていたものだろうか。そうするとこの50メートルほど上流で死亡している男性はS（32歳）ということとなる。死亡したSも沢の近くまで滑落しており、ズボン、靴は無く、長袖シャツにトランクス、靴下だけだった。体中に擦過傷が見て取れる。

警視庁と消防庁のヘリを要請するとともに、吊り上げポイントの整備をした。多少の立木を切り、ヘリの吊り上げポイントを整備した。

最初に飛来した消防庁のヘリに信号弾を打ち上げ場所を知らせ、下降してきた救急救命士がKの応急処置を施した後、Nの死亡確認も行われた。Kは担架に収容され、午後３時50分機内にピックアップされ、青梅市立総合病院に搬送された。

Nの遺体はバスケット担架に乗せホイスト場所まで搬送し、続いて進入してきた警視庁航空隊のヘリにピックアップされ機内に収容し搬送された。

後日保安係の見解では、あの植物は脱法ハーブのように今の法律では取り締まることができないとのことであった。

意識のないまま道のない山中を歩き回っている訳だから、転落などして全員死亡していても不思議でない事案である。残念ながら１人死者を出してしまったが、４人救助できたのは幸運としかいえない。しかしこんな即効性のある、それも長時間にわたり効き続ける危険極まりない植物の実が、身近に手に入り、それが法律に触れない脱法ドラッグであるとは、法の整備が急がれるところである。

「まったく、いい大人がバカな事はしないものだ」

いつかここで死んだ気がする萩野原

（青梅警察署嘱託員 山岳指導員　金（こん）　邦夫）

奥多摩昔語り

奥多摩の年中行事（2）

正月三ケ日は、一家の主が年男となり、早朝に若水汲みに出かけ、その水で雑煮を拵え、灯明を上げた神棚へ小鉢に盛った雑煮などを供え、又、門松、蔵、物置や外便所などの松飾りにも供えます。家族のものたちが揃うと餅を焼いて雑煮の鍋に入れ、お節料理を並べ、それをみんなで食べることから一年が始まります。

餅は、米の餅ばかりでなく、黍（キビ）や粟（アワ）などを混ぜたものも搗き、多い家では、七日も十日も搗きました。

雑煮は、家によって異なりますが、ケンチン汁と同じように、具の多い雑煮がこの地方の主流でした。ただし、ケンチン汁のように油やごぼうは使いませんでした。また、調味料は、醤油味が多く、これに、焼いた餅を入れ、椀によそって食べました。雑煮の材料は、菜（小松菜、ほうれん草、白菜、ネギ、ミツバ他）、大根、人参、里芋、ごぼう、豆腐、鶏肉、蒲鉾、なると、餅などでした（材料は、家によって異なる。）。

お節（おせち）料理は、かちぐり、こぶまき、ごまめ、かずのこ、黒豆、ごぼう、にんじん、里芋、れんこん、くわいなどの材料を煮物やきんぴらにして盛合せた料理です。かちぐりは、出陣や勝利を祝う食材であり、かずのこは、子孫繁栄を願うものであるように、食材に一つひとつに意味がありました。

お節料理とは、お節会（おせちえ）の供物のことで、それが、節供（せちく）節句という風習へとうつり変わったもので、平安時代から宮廷で行われていた節会の行事が一般化したものといわれています。

さて、お祝いに欠かせないものとして、酒がありますが、酒は、お神酒（おみき）とか、お清めの酒とかいわれるように、特別の意味合いがありました。

せめて、正月くらいは、祖神にお神酒を供え、神仏とともに祝いたいと思っても、屠蘇（とそ）を使う家は稀だったといわれています。現代のような、暖衣飽食（だんいほうしょく）の時代は、「毎日がお正月で、こてえされねえな。」と昔の人は、思っているかも知れません。

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま

（郷土史研究家　岡部義重）

奥多摩歳時記

炭焼き余話

「三頭の裾にチョイト立つ靄（もや）はヨー、猿公（えて）も来るよな山小屋で、可愛い男の焚く煙り、ソレ多摩のヨー、奥多摩　男意気」これは、杉田芳春作詞、三界実義作曲による奥多摩民謡炭焼小唄の一節ですが、終戦後の奥多摩地域では、盛んに炭焼きが行われました。炭焼きは、肉体を酷使する大変な仕事でしたが、一定の収入を見込むことができたので、農閑期を利用して炭焼きをしました。

炭焼きに詳しいAさん（77）の話です。

「自分は、16歳の時に親父について炭焼きをしたが、2、3年たって、竈築（つ）き以外は一人でも出来るようになると、作業の要領も分かってくるし、仕事にも張り合いができた。

1竈で、1俵4貫目（15kg）入りの白炭が6、7俵焼けた。

夕方、男子（おとこし）は3俵背負って帰るのが普通で、段取りの都合で遅くなると夜の坂道は危険なので1俵で帰った。その頃、一般サラリーマンの日当が300円位の時、白炭1俵500円だった。美空ひばりのレコードが欲しくて、炭が余計に焼けた時、3俵背負って帰っても、今日は、2俵背負って来たと親父に1俵少なく報告して、その金で、レコードを買ったりした。

その内、炭も1,500円に上がったが、プロパンガスが普及してきて、炭を使う人が減ってきたので、転職せざるをえなくなった。

隣の集落の3兄弟は、炭焼きの合間に獅子狂い（獅子舞）の練習ばかりしていて、帰る間際にちょこちょこっと仕事をするので、帰りは時々背負い荷の量が少なくなることがあった。弟たちが親の目を気にしても、1番上の兄（せな）は、途中の沢で、瀬干し（＊）をして、晩酌の山女魚でも取っていった方が、親父に喜ばれるといった調子だった。」

＊流れを迂回させて、本来の流れを干す漁法

【資料】 奥多摩町誌

（郷土史研究家　岡部義重）

ガイドだより

『星空浴』

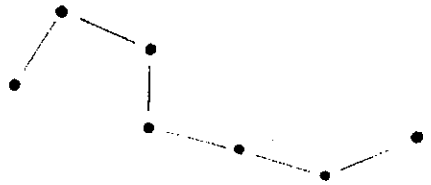
星空浴とはあまり聞きなれない方が多いかも知れません。ここ奥多摩町の森林セラピーを体験するプログラムの一部です。

昔から海水浴・温泉浴、また森林浴等は知られている訳ですが、私も、このセラピー事業の一端のお手伝いさせていただく中で、一度は星空観察をと思い、今年の7月、奥多摩地域振興財団事務局から町民対象の観察会が催行された機会に、研修目的で参加しました。

まず解説者として、元青梅市プラネタリウムで活躍されていた森澤一郎氏を招き、参加者一同、登計トレイル第一ステーションに集合。暗くなり始めて間もなく懐中電灯を頼りに出発。途中コナラの木にかじりついている甲虫（ゾウムシ等）のお食事を見学、皆で大騒ぎ…。間もなく展望台に着く。

期待していた夜空も参加者に味方してくれて、徐々に雲も切れ始め一安心。心はもう星の目に、解説者からまずアドバイスとして星空は肉眼で楽しんでください。初めから天体望遠鏡を持ち込むことはしないで欲しいとの事。双眼鏡はあると便利、明るい場所で星が見えにくい時や、星座の中にひそむ星雲・星団などを見るとき、とても手軽に確認できるそうです。

まず我々も背もたれのあるメッシュベンチで座りながら空を見上げ、これがたまらなく気分が良い。解説者から星のロマンチックな七夕伝説や、星にまつわる数々の話を聞いた後、雲間に七夕の織女星ベガと牽牛星アルタイル、それに白鳥座のデネブの一等星を結んで出来る夏の『大三角形』を目印にすると見つけやすくなりますと説明され、それから各辺を延長すると星座等の位置の見当をつけられるとの事。



北極星の位置を確かめながら、しばし解説者の強力なペンライトの先を追いつつ、夏の夜空のひと時を楽しませてくれた。この星空浴の目的は、現代社会でストレスや精神的に病んでいる方々の一つの解消法でもあり、たまには機会がありましたら、夜空を見上げて気分転換を試みてはいかがでしょうか。

（宇津木 隆）

施設案内

「アースガーデン・マルシェ」

奥多摩駅2階に、「森のカフェ アースガーデン」の2号店がオープン

マルシェでは、塩糀豚弁当や奥多摩産の食材を使用した弁当、「わさびコロッケバーガー」等のファーストフードや本格コーヒーが楽しめる。

オリジナルなお土産をはじめ、朝採れた新鮮野菜や本わさびなども買えるので、是非立ち寄ってみては！ 年中無休です。

電話　0428-74-9121
住所　西多摩郡 奥多摩町 氷川 210
営業　平日：8時～18時、土日祝：7時～18時

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、秋から冬に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号（2名様まで）を明記の上、奥多摩観光協会へ。　（抽選の場合あり）

① 11月6日(火)　紅葉の奥多摩湖右岸を歩く
　応募締切日　10月16日（登山）

② 11月8日(木)　山里歩きシリーズ①
　大丹波・川井地区
　応募締切日　10月18日（ハイキング）

③ 11月14日（水）　紅葉の倉戸山を歩く
　応募締切日　10月24日（登山）

④ 11月20日（火）　ゆっくり・じっくり植物観察②
　応募締切日　10月30日（ハイキング）

⑤ 11月22日（木）　鳩ノ巣城山登山
　応募締切日　11月1日（登山）

募集人員：各回30名　　参加費：700円

次号発行予定：平成25年1月15日

発行：奥多摩観光協会
住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210
電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789
編集：名人・達人観光ガイドの会